乳児の気質・母子相互作用と愛着形成

三宅和夫(北海道大学教育学部)

はじめに

われわれは、かつて29名の健常な乳児を対象とする縦断的研究において、初期の気質的傾向が生後1年における愛着の型と関係があることを報告した(Miyake et al. 1983,1985)。初期の気質的特徴として、新生児期のゴムの乳首が抜き去られたときの泣きの有無。タイプならびに生後7ヶ月半における見知らぬ人への反応と母との分離への反応が取り扱われ、生後1年の母への愛着の型は、エインスワースのStrange Situationによって分類された。生後1年の愛着がC型(いわゆる不安定な愛着:母親との分離の後に再会した時、接近や接触を求める一方で怒りや拒否を示すタイプ)と分類された児の中の多くが新生時期に泣きを示し、7.5ヶ月に恐れを示した。これに対しB型(いわゆる安定した愛着:母親と再会した時、接近や接触を求めるかあるいは離れたところからほほえみ・手をふる・話しかけるなどして交渉するタイプ)の中にはそのような児は少なかった。ちなみにA型(いわゆる不安定な愛着:母親との再会時に無視したり避けたりし交渉を求めないタイプ)はひとりも存在しなかった。

この研究の後、1982年に出生の児を対象としてほぼ同じような計画で生後3年間の縦断的研究を行い最近その資料の収集を終わった。この報告では、まずこの第2の研究から生後1年間における児の気質と愛着について第1の研究と同じような結果が得られるかどうかを検討し、さらに生後2年までの児の発達についての資料の一部の分析から、初期の気質的特徴がどのように持続しているかを検討する。

1. 児の気質的特徴と愛着の型

方法

対象となった児は1980年出生の29例と1982年出生の30例であるが、これらの59例のうち41例は出生直後より縦断的に資料が収集され、残り18例は生後4〜11ヶ月時より研究対象に加えられたものである。

この報告で扱われる資料は以下の3種である。

1. 新生児期〜ゴム製乳首を抜き去って吸啜が妨げられたときに児の示す反応(泣き)
2. 7.5ヶ月〜下に示6つのエピソードからなる見知らぬ人への反応と母との分離への反応を児より引き出すための観察

a)ベースライン、b)見知らぬ人の入室、c)母の退室、d)見知らぬ人の退室、e)見知らぬ人の再入室、f)母との再会

さらにこれと同じ日に10分間の自由な母子相互交渉場面の観察が行われた。

3. 12ヶ月〜エインスワースのStrange Situationによる母への愛着の測定。次の8つのエピソードからなる。

a)母・子入室、b)母・子、c)見知らぬ女性が加わる、d)母退室、e)母入室、見知らぬ女性退室、f)母退室、g)見知らぬ女性入室、h)母入室

a)〜h)は各3分であるが、d)・f)・g)は児の情緒的混乱のひどいときは短縮される。

結果

生後1年における愛着の型

Table 1に1980年出生グループ(Cohort1)と、1982年出生グループ(Cohort2)とのStrange Situationによる愛着の型の分類が示してある。この表からいずれのCohortにもA型がいないこと、約3/4がB型で1/4がC型に分類されてい

ることが分かる。なお、米国での研究では、A型23%、B型62%、C型15%であるから、われわれの対象としたグループにおいてはB型、C型とも10%ほど多く、A型がないというのが特徴的である。このことが日本における生後1年間の母子相互作用の特徴によるのか、児の生物学的特徴によるのか等の問題があるがここではこの点については立ち入らないことにする。

新生児期の泣きと愛着の型

Cohort1に属する児のうち19例、Cohort2に属する児のうち16例から新生児期の吸啜の妨害に対する反応(RIS;Response to Interruption of Sucking)のデータと12ヶ月の愛着行動の観察のデータの両方が得られた。

この結果はTable 2に示す通りであるが、いずれのCohortにおいてもC型の児は新生児期にRIS場面で泣きを示した者が多いという傾向がみられる(χ^2検定では有意ではないが、いずれのCohortにおいてもP<.10である)。もし2つのCohortをあわせるとこの傾向は有意(P<.05)である。一方B型の児では、新生児期のRISでの泣きとの間になんらの関係もみられない。

7.5ヶ月の恐れと愛着の型

7.5ヶ月の実験室での児に対する見知らぬ人の接近と母親の退室の情況で、児が示した回避反応、ぐずり、あそびの減少などによって「恐れを示す児」と「恐れを示さない児」に分類されたが、これと12ヶ月における愛着の型との関係を示したのがTable 3である。いずれのCohortにおいてもこの関係はFisherのExact Probability Testで(Cohort1;P<.05,Cohort2;P<.05)であり、明らかに7.5ヶ月で「恐れを示す児」が12ヶ月にC型となる傾向が存在する。

7.5ヶ月の母子相互交渉について

10分間の自由な母子間の相互交渉のビデオテープから母の児への働きかけについての分析が行われた。この点についてのCohort1の分析結果からすでに後にB型と分類される児の母の方がC型の母よりも「干渉介入」が少ない(t=2.54、P<.005)ということが報告されているが、Cohort2についてはB型、C型の母の間に有意な差はみられなかった(t=1.48)。

そこで、ここでは「干渉介入」の頻度のmedianによって母を2群に分けて、これとB型、C型との関係をみた。結果はTable 4に示す通りであるが、7.5ヶ月における母の「干渉介入」は12ヶ月の愛着の型といずれのCohortにおいても有意の関係を示さないことが分かる。

ここまでの結果は児の気質的傾向が12ヶ月の愛着の型とかなりはっきりとした関係を示すのに対し、母の働きかけ方はそのような関係を示していない。しかし、ここで児の気質と母の働きかけのスタイルとの間の交絡について考えてみることが必要である。そこでそのための予備的な試行としてB型、C型それぞれを7.5ヶ月の「恐れ」の度合によって2グループに分類し、これと母の「干渉介入」との関連を検討した。結果はTable 5に示す通りである。ここから児の「恐れ」の度合によって、母の「干渉介入」の効果が異なるということが分かる、つまり「恐れを示す児」と「干渉介入の多い母」との組み合わせはC型につながることが多いのに、「恐れを示さない児」と「干渉介入の多い母」との組み合わせはB型とつながることが多いのである。以上のことから母の「干渉介入」は単独では児の愛着の型と関係を示さぬが、これが児の気質(恐れ)と組み合わさった場合には一定の関係がみられるのである。「恐れを示す児」の場合、母の働きかけ方の如何が、後の愛着の型に関連するということは、むずかしい気質的特徴をもつ児において母子相互作用の質がとりわけ大切であることを示唆すると考えられる。

2. 愛着の型と後の行動発達

方法

Cohort1、Cohort2の児のうち生後23ヶ月までフォローすることができたのはあわせて40例であった。これらの児の行動特徴についていくつかの方法で検討がなされたが、ここではその

うちのひとつである次のような3つの異なる状況に対する児の反応についての分析結果について報告する。

3つの状況とは、多少とも児にとって新奇な場面である。すなわちa)児が母のいる部屋であそんでいるところへ、見知らぬ女性が入ってきてだまって椅子にすわり30秒後児に近づき絵カードを見せその名をたずねる、b)はじめて会う同年の同性の児とペアーでプレイルームに入れられる(2人の母はだまって椅子にすわっており、おもちゃが何種類か床の上に置かれている)、c)母とともに児が部屋に導かれ、やがてカーテンが開かれると120cmほどの高さの空き缶を組み合わせてつくられたロボットが立っており、児はテスターにロボットとあそぶように求められるという3つである。a)において見知らぬ女性にどのように反応するか、b)において相手の児に対してどのように反応するか、c)においてロボットに対してどのように反応するかが観察された。

結果

ここでは、それぞれの児がそれぞれの状況において(+)な反応を示したか、(−)の反応を示したかを検討し、まず12ヶ月においてB型の愛着を示した児とC型の愛着を示した児を比較し、つぎに7.5ヶ月に「恐れを示した児」と「恐れを示さなかった児」とを比較してみる。Figure 1は、B型の児、C型の児がそれぞれいくつの状況において(+)の反応を示したかを示したものである。なお(+)の反応とはa)において見知らぬ女性の働きかけに抵抗なく応じる、b)において相手の児にすすんで働きかける、c)においてロボットにさわったりして働きかけるなどをいう。図から分かるようにB型の児では3つの状況のうち2つにおいて(+)の反応を示した者がもっとも多く、ついで1つのみに(+)の反応で示した者が多い。これに対しC型の児ではいずれの状況にも(+)の反応を示さなかった者がもっとも多く、ついで1つのみに(+)の反応で示した者が多いが、3つの状況すべてに(+)の反応を示した者は皆無であった。B型とC型との間の差はχ^2検定で有意ではないが、$P<.10$であった。なお、いずれの状況にも(+)の反応を示さない児と1つのみに(+)の反応を示した児をひとまとめにし、2つの状況に(+)の反応を示した児とすべての状況に(+)の反応を示した児をひとまとめにして検定をすると有意な差($P<.05$)がみられた。

つぎに、7.5ヶ月時の「恐れを示した児」と「恐れを示さなかった児」について同じようにしてみたのがFigure 2であるが、両群間の差はχ^2検定で有意($P<.05$)であり、「恐れを示した児」の方が23ヶ月児において(+)の反応を新奇な状況に対して示す傾向が強いといえる。

これらの結果から23ヶ月までにわたって児の気質的傾向のひとつとしての新奇な状況に対して恐れ・不安・抑制を示す傾向はかなり安定的に持続するということがいえると思われる。しかしすでに見たように初期にむずかしい気質的傾向を示していた児すべてが12ヶ月時にC型の愛着を示すわけではないし、23ヶ月において(−)の反応を示すわけではない。なかには少数ではあるがB型の愛着を示す児、(+)の反応を示す児もいるのである。したがって児の初期の気質的傾向と母子相互作用との関連がさらに詳細に検討される必要がある。これまで一般に母親の側の要因(Sensitivity、responsivenessなど)が強調されてきたきらいがあり、それと比べ児の側の要因がすくなくとも健常児に関するかぎり軽視されてきたと思われる。今后こうした問題についてさらに研究を進めていきたいと考えている。

文献

Miyake, K., Chen, S. J., Ujiie, T., Satoh, K., & Takahashi, K. Infant's temperamental disposition, mother's mode of interaction, quality of attachment, and infant's

receptivity to socialization — Interim progress report. Annual Report 1981-1982, Research & Clinical Center for ChildDevelopment, Faculty of Education, Hokkaido University, 5,25-49,1983.

Miyake, K., Chen, S. J., & Campos, J. J. Infant temperament、mother's mode of interaction, and attachment in Japan: An interim report. Monographs of the Society for Research in Child Development, (Serial No. 209)50, Nos.1-2, 276-297, 1985.

TABLE 1

Number Percentageof Attachment Classification

Attachment Classification	Cohort 1 (N=29)	Cohort 2 (N=30)	Cohort 1+2 (N=59)
A	0	0	0
B	18 (72%)	22 (75.9%)	40 (74.1%)
C	7 (28%)	7 (24.1%)	14 (25.9%)
Psuedo-C	4	1	5

Note—Numbers in parenthesis are the percentage of Be C classifications in thetotal subjects who are clearly classified.

TABLE 2

Infant Proness to Show Crying to Nipple Removaland Attachment Classification

Future Attachment Classification	Cohort 1		Cohort 2		Cohort 1+2	
	Crier	Non-Crier	Crier	Non-Crier	Crier	Non-Crier
B	6	5	5	6	11	11
C	7	1	5	0	12	1

TABLE 3

Infant Disposition toward Fearfulress in Lab at 7.5 Months and Attachment Classification

Future Attachment Classification	Cohort 1		Cohort 2		Cohort 1+2	
	Fearful Infants	Non-Fearful Infants	Fearful Infants	Non-Fearful Infants	Fearful Infants	Non-Fearful Infants
B	2	5	6	10	8	15
C	6	1	6	1	12	2

TABLE 4

Maternal Intrusiveness in Lab at 7.5 Months and Attachment Classification

Future Attachment Classification	Cohort 1		Cohort 2		Cohort 1+2	
	Intrusive mothers	Non-Intrusive mothers	Intrusive mothers	Non-Intrusive mothers	Intrusive mothers	Non-Intrusive mothers
B	4	6	6	10	10	16
C	6	2	4	3	10	5

TABLE 5

Maternal Intrusiveness X Infant Fearfulness and Attachment Classification

Future Attachment Classification	Cohort 1 Intrusive Mothers		Cohort 2 Intrusive Mothers		Cohort 1+2 Intrusive Mothers	
	Fearful Infants	Non-Fearful Infants	Fearful Infants	Non-Fearful Infants	Fearful Infants	Non-Fearful Infants
B	0	4	1	5	1	9
C	5	1	3	0	8	1

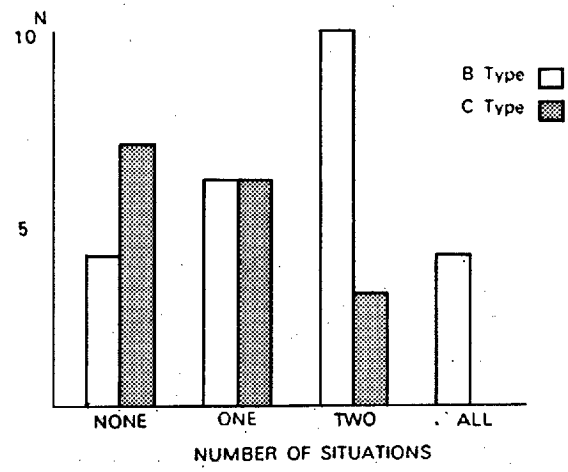

FIGURE 1. Consistency of Approach To Unfamiliar Objects Through the Three situations

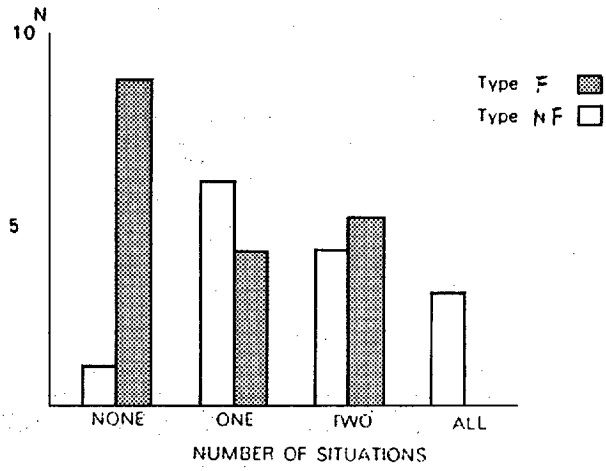

FIGURE 2. Consistency of Approach To Unfamiliar Objects Through the Three situations

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

はじめに

われわれは、かつて 29 名の健常な乳児を対象とする縦断的研究において、初期の気質的傾向が生後 1 年における愛着の型と関係があることを報告した(Miyake et a1.1983,1985)。初期の気質的特徴として、新生児期のゴムの乳首が抜き去られたときの泣きの有無。タイプならびに生後 7 ヶ月半における見知らぬ人への反応と母との分離への反応が取り扱われ、生後 1 年の母への愛着の型は、エインスワースの Strange Situation によって分類された。生後 1 年の愛着が C 型(いわゆる不安定な愛着:母親との分離の後に再会した時、接近や接触を求める一方で怒りや拒否を示すタイプ)と分類された児の中の多くが新生時期に泣きを示し、7.5 ヶ月に恐れを示した。これに対し B 型(いわゆる安定した愛着:母親と再会した時、接近や接触を求めるかあるいは離れたところがらほほえみ・手をふる・話しかけるなどして交渉するタイプ)の中にはそのような児は少なかった。ちなみに A 型(いわゆる不安定な愛着:母親との再会時に無視したり避けたりし交渉を求めないタイプ)はひとりも存在しなかった。

この研究の後、1982 年に出生の児を対象としてほぼ同じような計画で生後 3 年間の縦断的研究を行い最近その資料の収集を終わった。この報告では、まずこの第 2 の研究から生後 1 年間における児の気質と愛着について第 1 の研究と同じような結果が得られるかどうかを検討し、さらに生後 2 年までの児の発達についての資料の一部の分析から、初期の気質的特徴がどのように持続しているかを検討する。